

持続可能な社会へ

産業と環境の両立 世界が動き始めた

自然環境を守りつつ、豊かな暮らしにつながる経済成長も同時に果たすことはできるのか。環境技術にその答えを求める「グリーン・ニューディール（緑の内需）」の意義について、炭谷茂さんが語った。

温暖化は地球規模で進んでいて、影響はジワリと始まっています。海面が上昇したり、巨大なハリケーンが誕生したり。富山県でいえば、積雪量は減っているのに季節外れの雪が降る。カラスが高地に生息して、ライチョウの卵を狙うようになっています。



温暖化は地球規模で進んでいて、影響はジワリと始まっています。海面が上昇したり、巨大なハリケーンが誕生したり。富山県でいえば、積雪量は減っているのに季節外れの雪が降る。カラスが高地に生息して、ライチョウの卵を狙うようになっています。

そのためには、「環境立国を目指す」という国家ビジョンを日本政府がもつと示す必要があります。国が取り組むと言えば、産業界も国民も研究者も努力していけます。中小企業への財政上の支援などの手段が出てくるでしょう。

まさに、企業も国民も努力すればできる水準です。

鳩山首相は20年までに25%削減する必要があります。特に先進国は1990年比で80%削減する必要があります。

表明しましたが、決して高い目標とは言えません。企業も国民も努力すればできる水準です。

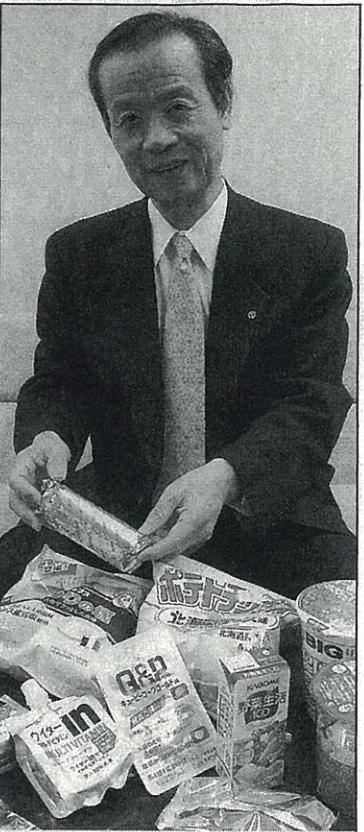
まさに、企業も国民も努力すればできる水準です。

大気汚染が特に問題だった時代は、国

大統領も提唱した「グリーン・ニューディール」政策です。アメリカには「グリーン・イズ・クリーン」という言葉があります。グリーンはドル紙幣も意味します。「環境はお金になる」と、世界が動き始めているのです。

そういう循環を応用したのが、オバマ大統領も提唱した「グリーン・ニューディール」政策です。アメリカには「グリーン・イズ・クリーン」という言葉があります。グリーンはドル紙幣も意味します。「環境はお金になる」と、世界が動き始めているのです。

かつて、排ガスの規制を厳しくする企業が競って排ガスを減らす技術を取り入れ、そういう自動車でないと売れなくなりました。CO₂でも同じです。燃料電池をうまく作る会社は成長するでしょう。



元環境事務次官
炭谷茂さん

実用化へ一步ずつ



▼車も走り出す

最初の試みは、09年8月の走行実験(写真)。エンジンを取り外した軽トラックの荷台に水素発生装置を乗せ、ゆっくらと走行した。この日は、約480kgのアルミを使ったが、時速10kmで30分近く走れたという。手前にあるのが、県内外に設置されている紙パックの回収ボックス。牛乳パックのよ

うに洗って開いてから入れる。

イルミネーションでPR



09年12月22日、富山市役所でイルミネーションを約3時間点灯した。「環境モデル都市」の富山市も同研究会に加わっており、デザインマークを約200個のLEDで彩った

写真。約500kgのアルミで数日間は点灯できそうだと。金沢21世紀美術館とJR福井駅でも同様の試みが行われ、北陸3県の市民に活動内容をPRした。今年度は、病院の非常用電源などへの導入に挑戦する。

すみたに・しげる

高岡市出身。1969年に厚生省(現厚生労働省)に入省。社会・援護局長などを歴任してから環境省に移り、2003年から約3年間、環境事務次官を務めた。

現在は社会福祉法人恩賜財団済生会(東京)の理事長。北陸グリーンエネルギー研究会の会長も務める。63歳。